

59 精神予防性無痛分娩法による自学自習妊婦教育用教材『痛くないお産』

藤原 聡子¹⁾，月澤美代子²⁾

¹⁾長野県看護大学／順天堂大学医学部 医史学研究室，²⁾順天堂大学医学部 医史学研究室

精神予防性無痛分娩法は、パプロフの高次神経学説を応用して、1949年にヴェリヴォフスキーらにより創案された「薬物を使用しない無痛分娩」法の一つである。1952年以降、ソ連では国策として導入され、産婦人科医師により、妊娠35週以降の妊婦に対して複数回の分娩準備教育が実践された。日本では、日本赤十字本部産院院長久慈直太郎の指示により、1953年に菅井正朝らを中心とした産科医師・助産師による無痛分娩研究会が組織され、妊娠9ヶ月以降の妊婦に対して計4回の妊婦教育の実践が開始された。翌1954年には、妊婦教育用教材の『痛くないお産』が無痛分娩研究会による独自教材として蒼樹社から出版された。

『痛くないお産』以前に出版された日本における妊婦教育のための教材や参考書は、妊娠期の心得や産褥期の育児技術獲得を主としていた。『痛くないお産』は、分娩期に特化しており、こうしたものの嚆矢となった。また、『痛くないお産』刊行の目的には、地方にいて本部産院の教室を受講できない妊婦のための自学用教材として機能させることがあった。無痛分娩研究会による「自序」には、刊行の目的として、「実際にこの無痛分娩を体験した女性の感想文をくわえ《精神予防性無痛分娩法》の産前教育を受ける機会のない妊婦が、自力でこの無痛分娩法を理解できる」ようにと書かれている。

『痛くないお産』には、無痛分娩法体験者による記録が巻末に付されていた。その内容は、①妊婦が精神予防性無痛分娩法を知ったきっかけ、②産前教室での学びによる妊婦の気持ちの変化と分娩体験、③体験者による無痛分娩の成功への秘訣、などである。①については、日赤外来に通院する妊婦が外来で勧誘を受けた、または雑誌で記事を読むなどがきっかけとなったこと、②については、講義時の無痛分娩体験者（先輩妊婦）からの話が出産にまつわる不安の除去に奏功したこと、講義での学びが自分の身体の変化に即して実感でき、学生時代にもどったような楽しさがあったこと、「逆子」など難産の症例であっても、それに即した医師の個別の説明があり安心できたことが記述されている。③については、妊婦がスタッフを信頼し、講義の演習で学習した助産（補助）動作を続ければ自分をコントロールする自信が生まれることが記述されている。なお、感想文の産婦の属性については年齢や初経、児体重が明示され、名前、学歴や職業については伏せられていた。

『痛くないお産』には、本部産院で実践された4回分の母親準備教育の講義内容が掲載されているが、その文体も講義における会話形式で書かれ、医師と妊婦との丁々発止の質疑応答もそのまま掲載されており、テキストとしては非常に斬新な体裁を持っていた。

精神予防性無痛分娩法の創案者であるヴェリヴォフスキーは、無痛分娩法成功のカギの一つは、医師を含む医療チーム全体の、妊婦に対するわかりやすい説明と丁寧で親切な接遇にかかっている、としている。『痛くないお産』は、この創案者の意を十分に汲み、新しい医療技術であった精神予防性無痛分娩を妊婦が十分にイメージできるように、平易で親しみやすい口語文体を用いて解説し、体験者の感想を取り入れ、指導者のみでなく妊婦が独り家庭でも自学できるよう工夫がされていた。このような工夫には、無痛分娩研究会の編集同人に女医や助産師が存在したことも大きいと考える。